

## 34 『名家灸選』所収の救急の灸法

鶴田 泰平

日本鍼灸研究会

『名家灸選』（文政十年「二八一三」刊）は、江戸後期の医家・浅井惟亨（一七六〇～一八二六）が著した灸法の専門書である。

浅井惟亨は京の人、もと山田元倫（のち玄助）と名のり、古方医家の浅井南溟（一七三四～一七八一）に入門し医を学び、後に京都浅井家（西浅井家）を嗣いだ。名は惟亨（惟良）、字は子元（子頭）、号を南圃（南阜）と称した。また、朝廷医でもあり、和氣の姓を用いることもあった。惟亨の他の著作には『名家方選』一卷（天明元年「二七八一」刊）、『微瘡約言』二卷（寛政十二年「二八〇〇」刊）、『微瘡秘録標記』（明・陳司成の著、浅井惟亨の標注、文化五年「二八一七」刊）、『養生録』三卷（文化十四年「二八一七」刊）などがある。

『名家灸選』には続編として、惟亨の門人の平井庸信（生没年未詳、丹波の人）が著した『続名家灸選』一卷（文化四年「一八〇七」序刊）、『名家灸選三編』一卷（文化十年「二八一三」序刊）があり、その体裁と構成は『名家灸選』に倣っている。天保七年（二八三六）にはこの三本をまとめて『名家灸選大成』として刊行されている。また、この三本を解説した書として、深谷伊三郎著『名家灸選積義』がある。

『名家灸選』は上部病・中部病・下部病・緩治病・急需病・瘡瘍病・婦人病・小児病・雑症と末尾の附録敷灸の一〇類から成る。この一〇類は四〇項目に分かれ、総数一三三法の灸法が所収されている。これらの灸法を選出するにあたり惟亨は、「簡便な方法で多くの病を治すことを切に願ひ、出典の新旧・内外、術の新旧・雅俗に拘らず、つとめて効験のあるものを採用した」ことを『名家灸選』の自序、例言の中で述べている。また、出典が明らかな灸法にはその出典名を付し、先師伝来や古伝・民間所伝で自己が効験を認めただものには「試効」と記載している。さらに、施灸箇所につ

いて、孔穴としての穴名の無いものや所在の表現が困難なものには「灸図」と称する小図を用いて所在を示している。

古来より灸は各種慢性・急性疾患の治療を目的として行われてきたが、急性疾患の中でも生命の危機に際するような状況下での施灸法も存在している。各灸法の専門書には少なからずそのような特殊灸法が記載されている。

今回は、『名家灸選』に所収されている灸法のうち「急需病」の灸法を調査することにより、著者浅井惟亭が注目した救急の灸法とその対象となった病症について検討した。

「急需病」中に所収の灸法は全十七法（全灸法の二・八％）で、病症項目は「傷寒」「瘧」「血症」「霍乱」「救急」の五項目が記されている。その病症項目ごとの灸法数と各灸法中に記されている詳細な病症名の種類【（一）内に記載】は以下の通りである。「傷寒」二法（「傷寒」のみ）、「瘧」五法（「瘧」のみ）、「血症」三法（「下血」「衄血へ脳衄」）、「吐血」一法、「霍乱」四法（「霍乱」

のみ）、「救急」三法（「卒死」のみ）であった。

なお、これらの病症名にはより詳細な病状説明が付記されているものもある（例「霍乱小便不通」「卒死而口張反折」など）。またこれらの灸法を典拠別に計数すると、「試効」四法、『救急方』三法、『救急易方』二法、『鍼灸五蘊抄』二法、『世医得効方』一法、『万病回春』一法、『蘇沈良方』一法、『医学綱目』一法、『普濟本事方』一法となる。

『名家灸選』の灸法には急性の症状に対する灸法の数も多いが、前記五病症は短時間で病態が激変する可能性を有するものである。また、典拠書物は漢籍が目立ち、成書年代の幅は宋から清と広いが、明・清といった比較的新しい年代の「救急」の語を付した救急療法専門の医方書の割合が高かった。

以上より浅井惟亭が「急需病」の灸法選出に際し、より緊迫した病症状に対する施灸法を選択したことが窺える。